

氷や雪

本紙コラム「うず潮」の執筆者の一人、長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授から連日メールが届く。長崎大から派遣されて、東日本大

震災の被災地での医療活動や被災地の状況などをつづったものだ▲山本さんは、熱帯医学の研究などでカリブ海の島国、ハイチに留学していたことがあり、昨年1月に起きたハイチ大地震では、日本の国際緊急援助隊医療チームの一員として被災者の治療に当たった▲メールによると、山本さんは出張で東京にいたことから、本県の医療チームより一足早く現地入り。岩手県遠野市を拠点に、津波で大きな被害を受けた釜石市や隣接の大槌町などの避難施設や孤立している集落など回り、被災住民の治療に当たっている▲同行の医師や看護師には、釜石市、大槌町の出身者がおり、連絡の取れない親類や知人がまだ多くいる中で、「故郷のために」と献身的に活動する姿なども紹介してあった▲山本さんが活動している地域は真冬並みの冷え込みで、雪の舞う天気になることも多いようだ。雪の中を車で大槌町に向かう途中、同町出身の看護師がつぶやいたという。「雪で、よかった。景色が見えないから」と▲「一面の雪で、向こうにあるべき町が見えない。それが本当のことなのか、雪のためなのかわからないが、それが救いだというのでしょうか」と山本さんはメールに書いていた。その心情は察するに余りある。(裕)